――くぅん。

犬が悲しい鳴き声を上げました。瞳に涙を滲ませ、桃太郎に頭を垂れます。

――お前は正気を失っていたのだね。

桃太郎は膝をつき、腰につけた巾着から『きびだんご』を取り出しました。

おばあさんがくれた、そのだんごを食べさせてやろうと言うのです。

――わん。

弱々しく鳴いた犬が桃太郎の手からだんごを食べると、みるみるうちに元気になっていくではありませんか。

――わん！わん！

そう、おばあさんの愛情のこもっただんごには不思議な力が宿っていたのです。

こうして、犬は桃太郎のお供になったのでした。